ニッポン ドクター和の 臨終図巻

⑨ 西村元一

がん治療に命燃やした名医

自分と同い年の友人が逝く。五十路を過ぎてもなお、友の訃報に慣れることはありません。悲しみの中で、この原稿を書きます。尊敬する医師仲間であった西村元一さんが5月31日に旅立ちました。58歳でした。この2年あまり、がんになった外科医として「元（げん）ちゃん先生」の愛称でメディアに多数登場していたので、ご存じの方も多いはずです。

元ちゃんは、金沢赤十字病院副院長であり、現役バリバリの外科医でした。一昨年3月、診療中に気の遠くなるような感覚に陥り、トイレで倒れます。その晩に検査を受け、翌朝、目覚めとともに胃がんを告げられました。リンパ節と肝臓の転移も認められ、治療をしなければ余命半年との診断でした。

それまでは食欲旺盛で、特に自覚症状はなかったといいます。大腸がん手術の専門医で、「せめて自分の専門分野でだけは命を落としたくない」と、大腸検査は毎年受けていましたが、胃の検査は6年ほど受けずじまいでした。紺屋の白袴とはまさにこのこと。私も似たようなものです。

さて、がん患者は、いつからがん患者になるのでしょう？ まるで禅問答ですが、答えは、告知をされたとき。がんは静かにゆっくり育つものですから、元ちゃんの体内にがんができたのは、おそらく10年以上も前から。それでもこの日まで、がん患者ではなかった。

一晩でがんの外科医からがん患者の立場になり、彼の人生は一変します。それまでは意識しなかった医療の冷たさ、患者と医療者の距離感を身をもって体験し、「この境遇を利用して、がんと闘う人とその家族を勇気づけたい」と2016年秋に『余命半年、僕はこうして乗り越えた！』という本を出版。余命宣告を受けてから1年半後のことです。

出版記念イベントは私とのトークライブでした。このとき、抗がん剤の副作用でかなり痩せられ、髪も抜けていましたが、顔つやは私よりも良く、気力に満ちていました。

「やらなければならないことがたくさんある。がんになって良かったとは思わないが、がんになったからこその出会いがあった。そして本まで出版できたのです」

秋晴れの似合う笑顔でした。その後も、講演会やメディアへの出演を精力的にこなし、地元金沢に、がん患者同士が悩みを共有できる場所として「元ちゃんハウス」をオープン。どんな医者よりも忙しく、患者と向き合いながら自身の治療も続け、命を燃やし、完全燃焼して、逝きました。

「人生とは、予想外の連続。だから余命宣告より長生きできます」

がんになったことで、さらに医療者の高みにのぼった元ちゃん。あなたのような人を、きっと名医と呼ぶのでしょう。友人であったことを一生誇りに思います。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。